

志賀直哉における父と子の問題

尹 福姫

*

父と子の問題は志賀直哉を論じる者なら、だれでも一回ぐらいいは取り上げるテーマだと思う。もちろんこの問題は志賀だけに限ったものではない。日本では明治時代になって、父子関係における新しい局面を迎えたと思うが、明治16年生まれの直哉とほぼ同世代の人で、父親の影響を大いに受けた作家に永井荷風と有島武郎がいる。三人とも上流家庭の長男で、父親が共に明治政府の官吏として職をもち、その後実業界に転じたことにおいて共通点をもっている。また彼らのようにきわめて状況の似ている立場ではないが、島崎藤村や森鷗外などもそれぞれ特異で個性的な親子関係を結んでいたと考えられる。

明治以後あらわれた父と子の問題のほとんどは、「維新革命後の初代と二代目のものの考え方の相違」としてとらえた本多秋五の言葉に要約されると思う（『志賀直哉』 岩波書店 平1.1）。

父と子の問題はどここの国にも存在したはずだが、韓国にもこの問題を扱った廉想渉という人の『三代』という作品がある。『三代』は、祖父—父—息子の世代が共存しながら、それぞれ違う精神世界を見せる内容となっていて、父子関係の様相が日本のそれと違うとはいえ、時代の生んだ韓国の家族状況の一面をうかがうことができる。

*

志賀直哉の作品はほとんど短篇小説で、長篇小説は『暗夜行路』一篇だけである。他に中編小説が何篇かあり、その中にはいわゆる三部作と呼ばれる『大津順吉』『或る男、其姉の死』『和解』がある。

この三作品はほぼ父親との関係を描いたもので、大正元年執筆の『大津順吉』は父との関係そのものを描いたと見るより、あとにつづく父との不和を予告し

た作品と言える。

次に『和解』と『或る男、其姉の死』は、もっぱら父との関係を中心に描いた作品で、突然きた父との和解の感動のあまり一気に書きあげた作品が『和解』というならば、『或る男、其姉の死』は、少々時間をおいて大正9年、それまでの不和の原因を追及する目的で書かれたものである。

この三部作も参考にしながら、これから直哉親子の不和・対立から和解にいたるまでの過程を考察していくことにする。

直哉の父、直温は嘉永6年(1853)生まれで、三十一歳の時の明治16年に直哉が生まれた。その前に直行という長男がいたが、直哉の生まれる前の年、三歳でなくなっているため、その時から直哉は長男として育てられる。直行の死を若い夫婦の不注意と考えた祖父母(直道と留女)は、自分たちの手で直哉を大切に育てていくが、直哉だけではなく、実は父の直温も父母以外の人に育てられた経験をもっている。

祖父の直道は、曾祖父直庸の次男として生まれ、長男の直員は直道より五歳上であったが、若隠居して直道の養父となり、後直道が幕府の命令で日光今市に赴任した6、7年間、幼少期の直温は養祖父母、つまり直員夫妻とともに暮らしている。これが原因なのか、直温は父の直道になんとなく距離を感じたらしく、直哉の『祖父』という作品の中には、

私は小さい時から祖父母に育てられ、父の場合と同じやうに私は父に親しまず、それが後年父と不和になった原因であつたことを思ふと、二代同じ事を繰り返したわけである。

(全集第四巻、p.565)

と語られている。つまり父が祖父に親しまなかつたことをここで直哉は間接的に述べている。

*

直哉は父親とよく喧嘩をしたが、その喧嘩の歴史にあたる主な事件だけを次に整理してみた。

明治34年 足尾銅山鉍毒事件が起こり、父と衝突

39年 東京帝国大学文科大学英文学科に入学、この際大学制服を父のひいきの高級洋服店で作ったことで父と喧嘩

- 40年 自家のお手伝いさんとの結婚騒ぎで大きく衝突
- 41年 友人等と行くことになった関西旅行の旅費と、大学の転科の件をめぐる父と意見衝突
- 45年 最初の単行本『留女』の出版費用をめぐる衝突、これが家出の直接的な原因となった
- 大正3年 父の反対を退けて勘解由小路資承の娘康子と結婚
この年、和解の目的で妹達と京都まで来た父にわざと会わない
- 4年 父の家より自ら進んで除籍
- 5年 長女の慧子の死後、墓地問題をめぐって衝突
- 6年 祖母の病氣見舞いのため、家に入出入りすることを許してくれるよう願うつもりで行なった父との対話が進んで、思わず和解成立

明治34年の足尾銅山鉍毒事件というのは、いわゆる公害問題で、当時大きな社会問題となった事件である。直哉の祖父直道はすでに手は引いたものの、この銅山の経営に関係したことがあるため、志賀家としてはかなり深い係わりをもっていた。ところが内村鑑三らの演説を通してこれを知った直哉は被害者の視察にいくと言い張り、父は銅山のいわゆる加害者の立場にあった古河市兵衛という人に対する気兼ねがあったから、それに反対した。この事件を通して父親と直哉との対立は表面化しはじめる。

それ以外には40年の結婚騒ぎも大きな衝突であったし、また45年の単行本『留女』の出版費用をめぐる衝突は家出の直接的な原因になった。この家出によって直哉親子の関係はその様相が大きく変わっていく。その次の大正3年、父の反対を退けた結婚などは中でも大きな衝突だったといえよう。

*

大正6年の父との和解は永い間の不和対立に比べればあまりにもあっけないような気がするが、ここで、注意を喚起しなければならないことは、不和といっても最初から最後まで父親との仲が悪かったのではなく、実はこの親子には不和の合間に時々和解の瞬間もあったということである。

明治39年2月6日有島生馬宛手紙（全集第十五巻、p.485）の中の「昨今父と

余程親しくなつた、毎日話をしない日はない位、時には僕が按摩をした事さえある、父は色々いひつけるやうになつた」という表現や、明治43年2月1日の日記（全集第十巻、p.342）の「父から相談を受けた事が嬉しかつた、自分はあれ程の関係になつてゐた父とダンダン親しみ得る事が不思議な位に思ふ」などの表現には、二人としては不思議に思われるほどの親密な姿が描かれている。また『或る男、其姉の死』の一部には次のような表現も見える。

兄には何か祖母だけでは満たされない気持がありました。そしてそれを兄は矢張り亡き母の幻影に求めて居たのです。妙な事です。祖母の愛には飽き満ちながら、兄は尚も愛情を求めてゐたのです。結局兄はそれを父にまで求めてゐたのが本当だつたと思ひます。然し兄はそれをはつきりとは意識してゐなかつたやうです。

（全集第二巻、p.437）

すなわち自分は意識せずに祖母に満たされない愛情を父に求めていたのだと語り手の弟に言わせている。

ここで直哉における父と子の問題が他の人、たとえば、永井荷風の場合と違う点が、ある程度はつきりしてくると思う。直哉の場合はあくまでも父との不和だけがつづいたのではないということである。さらに愛情を求めたということは、逆に自分が父親を実は愛していたという話にもなると思う。ただ愛情の表し方が少々へたで、それを表現することができなかつたということになるのではないだろうか。

志賀直哉全集第十五巻の〔手帳10〕（pp.214-215）で、直哉は自ら自家の不和の原因を分析している。単に父と自分とに限った問題としてではなく、家全体の問題としてとらえている。その中に述べられている頑固な祖母とやさしいが無能力な義母、この二人の存在は直哉父子の間に目に見えない、ある膜のようなものを作っていたと考えられる。それを直哉がいち早く感じ取っていたのである。またその中には自分の性質に対する考察も見える。父とそっくりな性質、竹盛天雄は「志賀直哉における父と子」（『国文学』 昭45.6～12）というシリーズの中で、父子対立の裏にある同じ「烈しい気性」同士の自己主張、自己との格闘を見抜いているが、この親子そっくりの「烈しい気性」が二人を互いに張り合わせた最も大きな原因であつたと思われる。これが原因で、先の話にもどるが、父親に自分の愛情を表現できなかつたのかも知れない。もしかすると愛情の表現を自分の敗北として考えたのかも知れない。

*

私は最近まで志賀親子の、同じ気性同士の衝突の結果として大正元年の家出があったのだと考えていた。が、資料を調べていくうちに以外な事に出会った。

余は、余の生活に大なる変化を与ふる事をつとめんとす、第一歩として余は余の家庭を出でざるべからず。(中略)

次に余は、余の国を去らざるべからず、国を出でて、余はかんそうせる露国に趣かん、(ノート1 明治38年末頃、全集第十五巻、p.277)

一日は一日と経つて行くではないか、何故君は此家を決然たつ事が出来ないのか。(手帳10 明治43.3.3以後、全集第十五巻、p.221)

自分は別居とか外国行きとかを想つた。(日記、大正1.8.24)

ノートや手帳、日記からの引用を時間順に並べてみたが、ここで分かるのは直哉はかなり前から家出に先立って自活、または独立のことを考えていて、家出は衝動的に起ったのではないという事である。もう一つ隠れた事実があるが、次の引用を見ていただきたい。全部日記から引いてみた。

他人と会ふといふ事は今年の自分にはいけない事であるやうだ、孤独を平気で仕事をするやうに何者かが自分を向けてゐるのかも知れないといふ気がする。(日記、明治44.1.6)

近頃は総ての人が下らないやうに思へて来た。それは恐らく他人が自分を下らなく思ふからかも知れぬ。何しろ仕事をしなければ駄目だ。

(日記、明治44.1.7)

仕事をしなければならぬ、仕事をしないからかう不安なのだ、

(日記、明治44.1.21)

二年位自分だけで好きに仕事をして、自信のある物だけを一冊の本にして出さうと思ふ。今のやうでは何んとなく「仕事」といふ気がしない。自分は若しかしたら一人にならうと思ふ。自分は今は感情からいつて、総てを破クワイ的に悪意に見ないではゐられない。殊に友達関係で左うである。

自分は友達を離れなければ自分の感情のままの心持になれない。

(日記、明治45.5.30)

前にあげた引用とも時期的に一致しているが、つまり家出の表面の理由は父との関係にあったものの、内部の理由としては、仕事に対するあせりと友人達との気まずい関係が潜在していたということである。言い換えると、内部の理由にささえられて、父との表面の理由をきっかけに家出に踏み込んだという図式が成立するのである。

*

家出というものは直哉にとって様々な意味をもっていたと思う。家を出てから、直哉は色々な経験を積んでいくようになる。尾道、大森、松江、京都を転々したあと、父の反対を無視して大正3年結婚している。前の年の大正2年には、山手線にはねられる事故を経験し、結婚後の最初の試練として、長女の死を迎えている。2、3年という短い間に、それまでなかった厳しい体験をしている。生と死に対する見方もこの時期大きく変わったらしく、名作『城崎にて』の中には蜂やいもり、鼠などの小動物の死を静かに見守る心境へと変わっていく姿があらわれている。

結局直哉は家出を通して人生についていろいろ考えるようになり、それまでよりさらに充実した人生を迎えることができたと思う。またこの家出こそ、父との和解にむかっただけの出発であったと同時に、ようやく父親の影響から離れて個人志賀直哉として新しい家長として、一人前の人間になるための出発であったのだと私は思っている。父との和解に前後して、以来直哉はつぎつぎと生涯の代表作となる秀作を発表するようになる。『城崎にて』『好人物の夫婦』『小僧の神様』『焚火』『暗夜行路』などがそれである。

結論的に言えば、父との不和对立が志賀文学を特徴あるものとして形づくったとすれば、父との和解はいよいよ志賀文学を成熟させた踏み台になったと言えるのではないだろうか。父親の存在こそ、志賀文学の底辺を築いた最高の材料であったのだ。

*全集の引用はすべて「志賀直哉全集」(岩波書店 昭48年、ただし第十五巻は昭59年)によるものである。

(お茶の水女子大学人間文化研究科1年)